

2011年10月19日

サイエンティフィック・システム研究会
教育環境分科会第2回会合

社会人基礎力の育成と自己評価能力向上への取り組み ー武蔵大学における三学部横断型ゼミナール・プロジェクトー

武蔵大学経済学部
笠原 一絵

【要約】

三学部横断型ゼミナール・プロジェクトでは、経済学部、人文学部、社会学部の学生がそれぞれの専門性を活かしながら、企業からの課題に対して協働して解決していく点に特徴がある。そのプロセスを通じて、学生の社会人基礎力を育成するとともに、自己評価能力を向上させることが可能となっている。

本ゼミナールを履修した学生は、口を揃えて「こんなに打ち込んで勉強したのは大学生生活で初めてのこと」と述べる。本講演では、学生がそんな達成感を得られる授業の仕組みや工夫点などについて紹介する。

【キーワード】

社会人基礎力、自己評価能力、CSR 報告書¹、SNS²、BtoB 企業³、キャリア・コンサルタント

1. はじめに

武蔵大学は開学以来、少人数制による「自調自考」のゼミナール形式の教育を重視してきた。この結果、自らの専門については深く思考し、同じゼミナールの学生同士や学生と教員の距離は比較的近く密接なコミュニケーションが図れるという長所を生み出した。その反面、異分野との接点が不足したり、限られた知り合いの中で過ごすことに慣れすぎてしまうなど、短所も見えるようになってきた。

変化の激しい現代社会においては、他者と積極的にコミュニケーションを取りながら業務を遂行し、物事に自主的・自律的に取り組む姿勢が必要とされている。しかし、本学における従来のゼミナールでは、この点での教育に難しさが生じてきたため、これまでのゼミナール教育の伝統と特徴を活かした試みとして、本プロジェクトが開始

¹ CSR ; Corporate Social Responsibility (企業の社会的責任)

² ソーシャル・ネットワーキング・サービス

³ BtoB ; Business to Business (企業間取引)

された。

本稿では、このプロジェクトの概要、目的とその効果について述べる。

2. 三学部横断型ゼミナール・プロジェクトの仕組み

本プロジェクトは経済学部、人文学部、社会学部の三学部が合同で1つのチームを構成し（約 15 名程度）、各学部でこれまで学んだ専門性を活かしながら、企業から提供された「企業の CSR 報告書を学生の視点から作成する」という課題に取り組む。

プロジェクトは大きく前半と後半の 2 つに分けていて、前半のフェーズ 1 では学部ごと（各 5 名程度）に予備調査を行い、中間発表としてまとめる。具体的には、経済学部は企業経営の分析、人文学部はコーポレート・アイデンティティに関する分析、社会学部は CSR の歴史やメディアでの取り上げられ方、などを担当する。

後半のフェーズ 2 では三学部横断のチームを構成し、中間発表までの各学部の調査結果についての情報を共有しつつ、CSR 報告書の制作に向けた議論を重ねる。最終報告会では、企業担当者に CSR 報告書を配布して評価を受けると共に、制作過程やその間の社会人基礎力の成長についての発表も行う。

半期（約 15 週間）でプロジェクトが終了するため、学生はかなりタイトなスケジュールで取り組む必要がある。授業がスタートしてから中間発表会までは約 6 週、最終報告会までが更に約 6 週のスケジュールで行われる。（授業には最初のガイダンス、最後の振り返りなどが追加される。）

3. 三学部横断型ゼミナール・プロジェクトの目的と教育効果を高めるための工夫

本プロジェクトにおいて学生が取り組む課題は「企業の CSR 報告書を学生の視点から作成する」というものだが、その過程を通じて、学生の社会人基礎力を伸ばすことが本プロジェクトにおける第一の目的である。社会人基礎力とは、経済産業省主催による企業の人事担当者や有識者から構成される研究会によってまとめられた「社会で働く上で必要になる能力」であり、社会（あるいは企業）が大学において育成することを求めている能力だといえる。

社会で働くということは、集団の中で働くということであり、社会人基礎力を育成する上では、チームで協力して活動を行う経験が不可欠といえよう。その意味では、学業を通じてチームでの活動経験を提供する本プロジェクトは、社会人基礎力の育成という目的にふさわしいものだといえるが、チームでの活動という点以外にも、社会人基礎力の育成を意識した以下の三つの仕掛けが組み込まれている。

- (1) 専門の異なる三学部の横断プロジェクト
- (2) 実際の企業の協力
- (3) SNS の利用やキャリア・コンサルタントとの面談を通じた正確な自己評価

能力の育成

本プロジェクトにおいては、専門の異なる三学部の学生が一つの課題に取り組むため、学生達は視点・利害の異なる他者と協同する際に生じる対立・葛藤を必ず経験することになる。とくに、授業前半（フェーズ1）においては学部ごとのチームで活動を行うため、そこで培ったチームワークが、学部横断になってから（フェーズ2）の学部ごとの対立に繋がる。対立・葛藤を乗り越える経験は、学生の視野を広げ、飛躍的に成長させるきっかけとなる。

また、通常のゼミと異なり、実際の企業の現場で働く方が授業に参加するため、学生にとっては「甘えの許されない」環境であるということも、社会人基礎力の育成においては重要である。残念ながら、教員と学生だけのゼミでは、少々遅刻しても、期限を守らなくても大丈夫、プレゼンテーションはなんとか形になればそれで良いといった甘えが生じてしまう場合がある。しかし、企業で働く大学外の方々に対しては、そういった甘えは一切通用しないということを学生達が自覚することで、社会人として働くための心構えを身に着けることが可能となる。また、学生が望む情報が企業秘密などの制約によって手に入らない、ゼミで学んだ専門知識が専門外の人たちには通用しないといった経験も、教員と学生だけのゼミでは得られないものである。

さらには、授業のために設計された専用 SNS の活用やキャリア・コンサルタントとの面談も社会人基礎力の育成において重要な要素である。本プロジェクトにおけるチームで全力を尽くすという経験は、学生にとって苦しさを伴うものの、ある種クラブ活動や文化祭のような昂揚感・達成感を味わうことのできるものである。そのため、ともすれば「単にお祭り騒ぎで盛り上がり過ぎて終わり」という結果を招いてしまう危険性がある。

そこで、本プロジェクトにおいては、単なるお祭り騒ぎで終わらせることなく、学生達の社会人基礎力の育成を行うため、学生が個人で活動を振り返る機会を設けている。学生達は毎回の活動を振り返り SNS 上において日記を書くことを求められる。これは、学生がチームではなく個人として活動を振り返り、自身を見つめ直す重要な機会となる。また、授業期間中に 3 回、キャリア・コンサルタントとの面談を受けることで、自分では気づかなかった長所や短所、取り組むべき課題などについて考え直すことが可能となる。

以上の社会人基礎力を伸ばすための仕掛け、とくに、SNS の活用、キャリア・コンサルタントとの面談は、正確な自己評価能力を向上という本プロジェクトにおけるもう一つの目的にもつながるものである。わずか 3 か月の間に社会人基礎力を完全に伸ばすということは不可能であり、また、本プロジェクトがあくまで大学生活の一部、124 の卒業単位のうちの 4 単位であることを考えると、授業期間のみですべてが完結するような設計はふさわしくない。本プロジェクトが学生に求めることは、授業期間終

了後も、現状を正しく評価し、社会人基礎力を伸ばし続けることである。そのために、授業期間内には、社会人基礎力という尺度、SNS における日記の執筆、キャリア・コンサルタントとの面談を利用して、自分自身に見つめ、自己を正しく評価する能力を身に付けさせることを目指しているのである。

4. キャリア支援へのつながり

一般に大学でのキャリア支援というと、企業への就職が最終目的となりがちであるが、本プロジェクトでは「学生の人間的成長を通じた生涯にわたるキャリア支援」という位置づけを明確にしている。これは、就職活動における表面的なエントリーシートの書き方や面接テクニックを教えるのではなく、その際のコンテンツを作り込むための経験の場を提供しているとも言える。

本プロジェクトを履修すると、学生は自分自身についてじっくりと振り返り、より根幹的な物の見方をするようになる。一度自己評価し自らについて表現出来るようになると、将来にわたり必要に応じてその能力は再現され発揮できると考える。その意味で、本プロジェクトの果たす役割は重要である。

さらに、学生は就職先に大手企業や知名度の高い企業を選ぶ傾向が高い。しかし、それは企業間取引を行っている企業や、消費者に対して広告宣伝を行わない企業の存在を知らないからであり、我々が協力企業として BtoB 企業を選ぶ目的もその点にある。協力企業である BtoB 企業について様々な角度から調べていき、企業担当者からの話をじっくりと聞くことで、学生は全く未知の世界が広がっていることに気付く。しかも BtoB 企業の役割とその重要性を認識すると、こういった企業で働くことの意義も見出していき、就職先の企業として選択肢を広げていくのである。

ただし、本プロジェクトとして協力企業の開拓をいかに組織的に進めていくかという点については、今後引き続き検討の余地がある。

5. 三学部横断型ゼミナール・プロジェクトに対する学生の評価

フェーズ 2 になり 15 名ほどの三学部横断のチームになると簡単には意見がまとまらず、しばらくは時間だけが過ぎてしまうこととなり、フェーズ 2 の後半に作業が集中する傾向が多い。そのため、学生は授業時間外での集まりの他に、自宅での作業や SNS でのコミュニケーションを頻繁に行う。家族や友人よりもチームで過ごす時間が増えていくことで、学部ごとの対立や葛藤を乗り越え 1 つの目標に向かって集中力を高め、課題を達成していく。また、協働作業を行わなければ到達できない課題が設定されているので、課題を高い壁と感じていた学生ほど達成感は大きく、自信を持っていた学生ですら自らの非力さを痛感する。

平成 22 年度後期履修生 (N=57) を対象としてアンケート調査を行った結果、学部横断ゼミの授業全体に対する満足度は極めて高く、86%の受講生が「とても満足してい

る（4段階中4）」（図1）と回答している。ゼミの内容については、とくに「チームでの活動」（図2）「他学部の学生との交流」（図3）に対する満足度が高く、7割以上の受講生が「とても満足している（4段階中4）」と回答した。また、「キャリア・コンサルタントとの面談」（図4）も8割以上の受講生が「とても満足している（4段階中4）」「ある程度満足している（4段階中3）」と回答している。

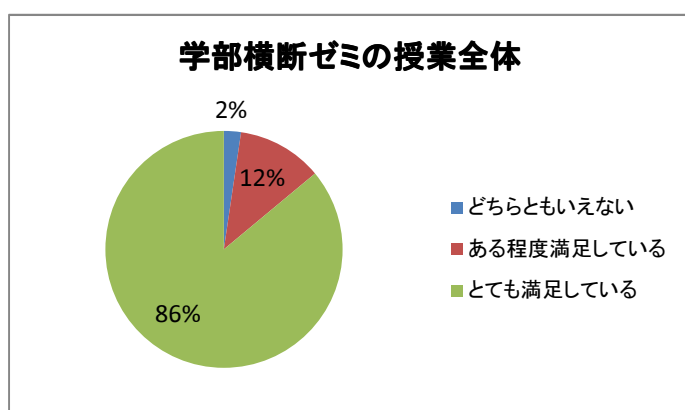


図 1

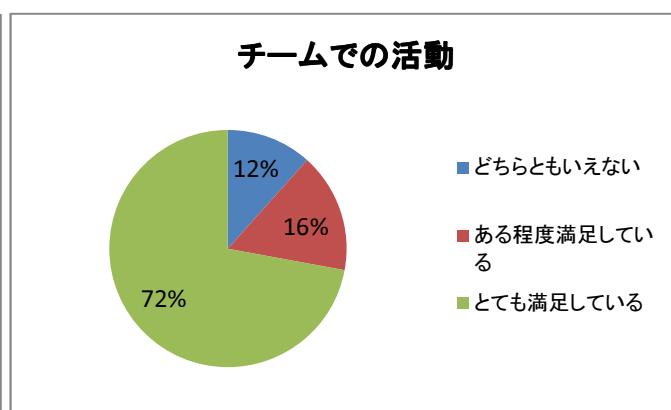


図 2

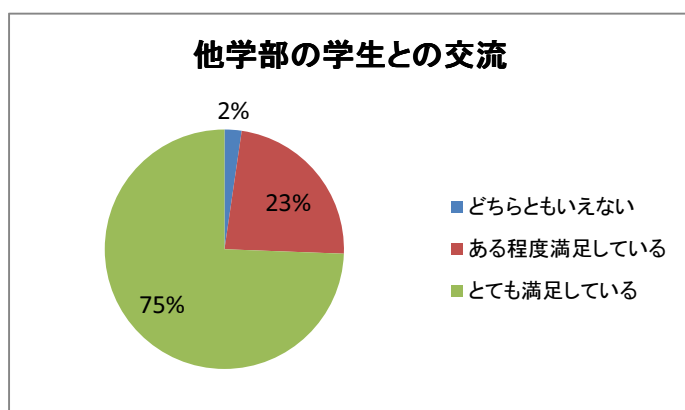


図 3

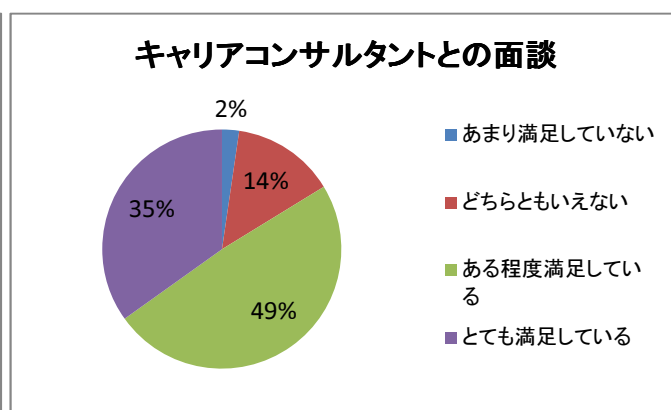


図 4

6. おわりに

本プロジェクトには学生にとって困難な仕掛けが設定されているにも関わらず、教員は学生の活動を見守るというスタンスであり、課題内容についての直接の手助けはなるべくしない。活動途中においては課題の困難さ、スケジュールの厳しさ、通常のゼミのように簡単に手助けをしてくれない教員に対する不満や反発がみられることもある。しかし、学生たちが困難な状況を自分たちの力で乗り越えたという感覚が学生にとって大きな自信となるのである。